

パネルディスカッション４：在宅リハビリテーションの現状と課題

演題名	在宅リハビリテーションにおける言語療法の課題と展望
-----	---------------------------

概要

【はじめに】

言語聴覚士（ST）の歴史はリハビリテーションの３職種の中で最も浅いが、1999年に国家資格を有してから年々増加しており、2013年3月末時点での国家試験合格者累計は約2万2千人を超えている。その中で、ほとんどのSTが所属しているのが医療機関（73.7%）であるものの、訪問看護ステーションにおいての常勤換算数はこの5年間で著しく増加し続けている。この現状は地域、在宅の現場でのSTの専門領域に対してのニーズが高まっていることであり、かつ自立支援とリスク管理に積極的に関わることが責務だと感じている。今回はこれらの現状を踏まえながら、個人的に特に関わりの深い摂食嚥下の訪問リハの実情を提示し、私見を交えて課題と展望を述べる。

【訪問STの現状】

訪問リハビリテーション（訪問リハ）の意義は、介護保険法に制定されている通り、「心身の機能の維持回復を図り、日常生活の自立を助けるため」にあり、長期にわたり関わることで、「生活再建と質の向上を促す（全国訪問リハビリテーション研究会.2000）」ことを目的としている。STの対象となる疾患は、脳血管障害を主因とする病変が多かったが、近年では加齢に伴う機能の低下や嚥下性肺炎といった、多岐にわたる食事の問題への対応を求められることが著しく増えている。ST有職者の84%が摂食嚥下障害に携わっている実状を考えると、在宅でもその専門性を発揮するべきだと考えている。しかし限られた情報のもと、迅速・的確に病態を現場で判定することの難しさや、急変時の対応などに際してのセラピストの不安の要素は大きい。訪問リハの現場では、リスク管理を徹底しながら、自立をサポートするという、両面を並行させて支援して行く必要がある。

【課題と展望】

それらを解決して行くためにリハビリテーションの３職種は、合同で訪問リハビリテーション振興財団を設立した。本団体は4年前から毎年、各都道府県で訪問リハの実務者向けに研修会を開催している。この毎年の研修会のテーマの中には、『連携』と『リスク管理』が必須のプログラムとして組み込まれている。摂食嚥下障害に対しては、必ずこれらのテーマで関わるのが最も重要であり、3職種で連携しながら、質の高い訪問リハ展開して行く準備が整いつつある。在宅において“安全な食事”と“疾病予防”維持するためには、主治医を中心に3職種間と、さらには看護師・介護士などの職種間での連携も積極的に強化して行きたい。